

滑走路のまつすぐさ——屋良健一郎

萩原慎一郎歌集『滑走路』(角川書店)が出版された。作者は一九八四年生、りとむ短歌会所属。

・きみからのメールを待っているあいだ送信メール読み返したり・靴ひもを結び直しているときに春の匂いが横を過ぎゆく

一首目、あまりにも平明ではあるが、確かにこういう経験はあるという共感が勝る。瑞々しい恋の場面として好感が持てる。二首目、靴ひもが解けて立ち止まつた時に季節の変化に気付く。歩き続けていては気付かないことを掬い取る鋭敏さ。

・うしろ手に携帯電話抜くときにガンマンになつた気がする僕は・停留所に止まってバスを降りるときは月面なのかもしれず・深海にある折畳傘を取り出すために手を鞄の底へ

・携帯電話をズボンの後ろポケットから取り出す、バスから降りる、鞄に手を入れる。なかなか歌にしようとは思わない日常的な動作だが、ユニークな比喩を用い、非日常な場面として読者に浮かび上がらせる。鞄が水を湛える三首目が特に印象的。言葉により日常のワンシーンが詩となる楽しさをこれらの歌は教える。

・毎日の雑務の果てに思うのは「もつと勉強すればよかつた」・コンビニの駐車場から旅に発つきみはかつての級友だった・コピー用紙補充しながらこの今まで終わるわけにはいかぬ人生・頭を下げる頭を下げる牛丼を食べて頭を下げる暮れゆく

もつと勉強していたら違う仕事をしていただのかも、「このまま終わるわけにはいかぬ」と、労働者の生々しい感情を歌にする。生々しさの力。二首目、仕事や経済的な面で、この友は羨ましさを増す。四首目、「頭を下げて」が仕事と食事の場面どちらの様子も示し、そのリフレインが無機質さを感じさせて寂しい。クロールのように未来へ手を伸ばせ闇が僕らを追い越す前に

・ここらのなかにある飛び箱を少年の日のように助走して越えてゆけ

命令形で他者を、自分を鼓舞する歌も多い。これほどまで愚直でまぶしい応援歌は珍しいのではないか。恋の歌も仕事の歌も応援歌も、まつすぐさが溢れる歌集だ。

大変残念なことに作者は歌集の原稿を入稿後に急逝したという。略歴を見ると数々の短歌コンクールで入賞していたようだ。私は作者と面識がないが、「短歌研究新人賞」に応募していた頃、発表号で自分の名前を探していく、年の近い(私より一つ下)萩原慎一郎の名を見かけたことが印象に残っている(名前も少しだけ似ている)。私が初めて応募した二〇〇四年、予選通過(二首掲載)だつたのだが、彼も同じ結果だつた。二〇一二年、佳作(五首掲載)の時、隣の頁に同じく佳作の彼の名があつた。二〇〇四年には私もかなり若い応募者だつたのだが、年を重ねるごとに年下の応募者も増え、ずっと受賞できずにいる自分の力の無さを感じる中、まだ応募している萩原の名を見て頑張ろうと思つたこともある。面識はないが勝手に同志のようを感じていたのだ。歌集を前にする今、私は彼に励まされていたのだと改めて思う。